『何を馬鹿、キサマは何をヌカスか』

僕は一月程前、斷言はダヽイストの詩の原稿を送つた所、夫を應募小說の中へ混ぜてゐたから原稿を戻してくれと言つてやつたら『そんな原稿は來てゐません』と葉書を書いて寄こしたのはキサマだらうと言ふような事を言つて、熱烈な聲でドナツた。

階下に居た店員や、西村渚山なんかも驚いてやつて來たやうだつた。

僕は渚山の蒼白い顏に挨拶して、オーオーと泣き乍ら大鐙閣を飛び出した。

汁粉屋へ寄つて汁粉を食つても、氣分が靜まらなかつた。

サメザメと泣きたい氣持と、暗い地の底へでも這入りたい氣がしてゐた。

淺草の田原町の散髮屋で、伸ばしてゐた髮を五分刈につんで了つて、帽子もかぶらないで、馬道の黑瀨の所へ行つた。

黑瀨春吉はシユンキチと讀むので、パンタライ社と言つて、歌劇女優派出兼淫賣屋のやうな營業をしてゐるのだつた。

彼には一つの逸話があつた。惚れた女が言ふ事を聞くまで、自分の手の指を一本宛切つて、贈